社会科における見方考え方とその育成の方法

— 中学校社会科公民的分野及び公民科「現代社会」の単元開発を事例として —

桑原 敏典

本研究は、社会科の教育内容の中核である見方考え方を育成するための方法について、中学校社会科公民的分野の内容(1)－イ「現代社会をとらえる見方や考え方」及び高等学校公民科「現代社会」を事例として具体的に示そうとするものである。平成20年改訂の中学校学習指導要領において、社会科には一つの大きな変化が見られた。それまで、社会科は個別の事象や出来事によって内容が構成され、それらの理解を通して公民としての自覚や態度を含む資質の育成が図られてきていたが、この度の改訂においてはそれらの事象や出来事をとらえるための見方や考え方が重視され、それが「対立と合意、効率と公正」として具体的に提示されたのである。従来、見方考え方の重要性が指摘されながらも普及しなかった理由の一つとして、それが何を意味しており、具体的にどのような概念であるかということが明確でなかったことが挙げられよう。その意味では、今回、4つの概念が示されたことの意義は大きい。しかし、それによって従来このような発想での社会科の授業づくりに慣れていない学校現場を一層混乱させ、見方考え方による授業づくりの普及を妨げてしまうことも予想される。本研究では、見方考え方を育てる授業づくりの方法を具体的な単元開発を通して明らかにしていくとともに、今後克服すべき課題を提示していきたい。

Keywords：社会科，中学校社会科公民的分野，見方考え方

I. はじめに一問題の所在—

本研究は、社会科の教育内容の中核である見方考え方を育成するための方法について、中学校社会科公民的分野の内容(1)－イ「現代社会をとらえる見方や考え方」及び公民科「現代社会」を事例として具体的に示そうとするものである。

平成20年改訂の学習指導要領において、中学校社会科公民的分野の内容は大きく変化した。これまでの、政治や経済に関する制度や仕組み中心の構成から、見方や考え方を習得させ、それを活用して事象や出来事について生徒に考えたり、判断させたりすることが重視されるようになり、見方考え方を習得させる学習が最初に位置づけられるとともに、それらを活用して、自ら課題を設定して探究していく学習が最後の内容(4)のイに設定されるようになったのである。

従来から、見方考え方の習得は重視されてはいたものの、内容としてそれらが明確に位置づけられることはなかったし、まして、それに当たる概念が具体的に示されることはなかった。今回の改訂の変化は、現場の社会科授業を大きく変えるであろうということが期待される一方で、社会科の教師の多くが戸惑っているのも確かである。なぜなら、従来、社会科は事実を教え、それを理解させたうえで定着させることが基本であると考えられており、事実の背後にある概念や価値は後回しにされ、授業の中で実際に言及されることはなかったからである。教師自身も、そのような事実の捉え方には慣れていないことが容易に推測できるのである。

そこで、本研究では、「対立と合意、効率と公正」を、公民的分野の学習のスタート時においてどのよ

岡山大学大学院教育学研究科社会・言語教育学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

Study on the strategy of developing children's perspectives on society: On the basis of making lesson plans of the social studies in junior high school and the civics in high school.

Toshinori KUWABARA

Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

うに捉えさせていくべきかを具体的な単元開発を通して明らかにしていくことにしたい。

II. 「対立と合意，効率と公正」の読み解き方

学習指導要領の『解説』を手がかりとしてこれらの概念の意味を読み解くならば，以下のように整理できる。

○対立＝考え方や価値観，利害の違いに基づいて生じた集団や個人間の問題（トラブル）や紛争

○公正＝なされた合意が全ての構成員にとって公平なものとなっているかどうかという判断基準

この『解説』の記述を読んだうえで，これらの概念を教えるための事例を中学校社会科の教員を目標としている大学生に考えさせると，以下のような事象が提示された。

●日常生活に見られる事象

- ア) 家庭内でのテレビのチャンネル争い
- イ) 近隣の清掃活動
- ウ) グループでの旅行の行先の決定
- エ) ショッピングモール建設の是非

●政治的・経済的・社会的事象

- オ) 憲法改正を巡る政治的対立
- カ) 消費税問題
- キ) 原発建設の是非
- ク) パレスチナ問題

いずれも，集団や社会の中での利害，考え方，価値観の対立によって生じている問題であり，何らかの合意を目指して努力がなされるものである。しかも，その解決に向けては，問題に関わる人々がお互いに納得できるような公正さが求められるということも明らかである。しかし，いずれの問題についても，効率の観点については説明が難しい。これらのうち，大学生が，効率の観点から事象を明確に説明することができたのは，イ，ウ，エ，カ，キである。そのうちの多くは，「効率＝無駄を省く＝節約」と捉えていた。例えば，ウの旅行の行先の決定については，費用と時間をできるだけ節約するにはどのような選択が正しいかを考えることが効率を追求することであると答えていた。また，カの消費税問題に関して言えば，いわゆる財政の無駄遣いが効率の観点に関わると考えていた。原発に関してはエネルギーの節約の問題が，効率に関わると捉えられていた。このように，効率を何の制約もない各人の節約に向けての努力と捉えてしまうと，以下のような問題が生じる。

- ・どの程度節約できれば効率性を達成していることになるかは，各人の主観の問題になってしまう

う。

- ・効率が公正と対になる概念として示されている意図が不明瞭となる。

したがって，ここで言う効率とは，ただ無駄がないというだけではなく，「誰かの満足度を低下させなければ，他の人の満足度を上げることはできない状態」である「パレート最適」を指しているのである。『解説』に，「無駄を省く」の前にわざわざ「社会全体で」と書いている意味はここにある。この「社会全体で」とは，個々人の努力が集まった意味での社会全体というわけではなく，社会全体で最大の満足を得られるような状態に達しているかどうかということなのである。

以上のように，「対立と合意，効率と公正」という4つの概念の中で，対立，合意，公正は比較的把握し易いが，効率はこれらの4つの概念が一組のものとして示されていること，特に公正と対になっていることをふまえてその意味を捉えなければならないのである。

III. 効率概念の捉え方

効率概念を捉えさせ得る教材とはどのようなものであり，それをいかに見出すことができるかを明らかにするには，効率概念自体を理解する手順を仮想的に示すことが有効であろう。本研究では，ミクロ経済学のテキストなどを参考に，以下のような手順を考案した。

- ステップ1：限られた資源を配分する方法を考える。
- ステップ2：考案した方法の妥当性を説明する。
- ステップ3：配分しても資源が余っている状態がなぜ問題となるのか考える。
- ステップ4：社会全体で無駄のない状態が他に考えられないか検討する。
- ステップ5：望ましい配分のための他の条件を考える。

上記の手順を，大学生を対象に実施したところ，次のような反応が見られた。ステップ1では，経済学のテキストなどでよく見られる事例であるケーキ（ピザ）の配分を取り上げた。一定の人数でケーキを分けるとしたら，どのように分けるのが望ましいかを考えさせると，均等に分けるという答えが返ってきた。次のステップとして，なぜ，均等に分けるのが望ましいかと尋ねるとほぼ全員が公平だからと回答した。次に，公平であることが条件であれば，全員に均等に配分した後さらに余りがある状態はなぜいけないのかを考えさせる。すると，無駄が出るからという答えが返ってくる。そこで，無駄が出る

状態と、全て配分した状態の違いについて考えさせる。全て配分し無駄が無い状態とは、与えられたケーキによって皆が最大限の満足を得られるということであることを認識させたいのであるが、この認識に至ることは非常に困難であった。そこで、ケーキを欲するのはなぜか、ケーキを食べることによって得られるものは何かを考えさせた。そのうえで、ケーキを余すところなく配分することによって、皆の食欲が最大限満足すること、すなわち、一個のケーキから得られる満足度が100とすれば、その100が余りなく配分された状態であるということを理解させた。しかし、ここで疑問が示された。もし、そうであれば、一人が全てのケーキを食べても、あるいは、何人かに配分せず、他の人が全てのケーキを食べても社会全体の満足の度合いは同じではないかというのである。ここで、効率だけを追求していたのでは望ましい配分がなされないということに気付き、もう一つの公正という条件が必要であることを認識するのである。

必ずしも学術的な手続きをふまえた調査ではないので、根拠としては不十分ではあることは確かである。しかし、効率とは限られた何らかの資源の配分の問題と気付かせたうえで、社会全体としてその資源を最大限に活かした配分の仕方はどのようなものか、それが個人にとっても望ましいものかどうかを考えさせることで、効率概念の意味を理解が深まるということと言えるのではないか。

IV. 「対立と合意、効率と公正」を捉えさせる授業のための教材研究の手順

公民的分野の授業開発のための教材研究は、以下のような二つの方向で進められる。

ア) それらの制度や仕組みはどのような原理に基づいているのか？（＝抽象化）

イ) それらの制度や仕組みはどのように機能しているのか？（＝具体化）

公民的分野の教育内容は、政治や経済の制度や仕組みであることが多い。しかし、それだけではなく、それに関わって生じている社会的事象や出来事、制度や仕組みの機能や運用の仕方、制度や仕組みの原理となっている法則・理論や、制度や仕組みの背後にあるシステム、それらを選択する根拠となっている主義や価値などである。これらは前者のものほど具体的特殊的であり、後者のものほど一般的抽象的である。公民的分野の教育内容の中心である制度や仕組みは、これらの層になっている知識の中間に位置づけられる。したがって、教材研究は、抽象化の方向と具体化の方向の両面に向かって行われ、この

幅が広がれば広がるほど、教材研究が深まったと言えるのである。

しかし、「対立と合意、効率と公正」という概念的枠組みを捉えさせる授業のための教材研究は、先に示した知識の層で言えば、最も一般的抽象的な地点から始まることになる。そのため、教材研究の方向は以下のようなになる。

ウ) 概念的枠組みは、制度や仕組みにどのように反映しているのか？（＝第一段階の具体化）

エ) 制度や仕組みは、概念的枠組みを実現するためにどのように機能しているのか？（＝第二段階の具体化）

ただし、この手順の概念的枠組みとは、「効率と公正」を指している。「対立と合意」は、事象や出来事の特徴を記述する原理であるため、教材選択の際の基準となる。

以上の考察を踏まえて、教材研究の手順を設定すると以下のようなになる。

① 対立から合意を目指す事例の選択

② 効率の観点からの考察

③ 公正の観点からの考察

①の段階では、様々な事象の中からトラブルや紛争にあたるもの、解決に向けて合意が目指されるべきものを取り上げる。その際に留意すべきこととしては、「習得」の段階においては、対立の構造ができる限り単純なものを選ぶということである。対立しているのは誰か、何を求めて対立をしているのか、これらが複雑なものは、次の段階の効率を考える際に、事象の分析が複雑になってしまう。

②の段階では、取り上げた事象について効率的な状態（＝最適に資源が配分されている状態）とは何かを明らかにしていく。そのためには、配分されている限りある資源は何か、それによってどのような欲求が満たされるのか、といった点について考察していかなければならない。

③の段階では、その事象において、効率的な状態が公正という点も満たしているかどうか、満たしていないならば、どのような修正が必要かを明らかにしていかなければならない。その際には、『解説』に示されているように、手続き、機会、結果の三つの点から公正さを検討していく必要がある。

以上のような教材研究の手順をふまえると、「対立と合意、効率と公正」という概念的枠組みを捉えさせ得る教材を見出すことができるはずである。ここで、既に発表されている研究成果の中に示されている教材を、下記の観点から分析してみることにしよう。

①対立している欲求・利害

②配分されている限りある資源

③検討されている公正さ

それぞれの観点に該当する事象がない場合は、「なし」としている。

A. 橋本康弘「マンションのトラブル」(堀内・伊藤・篠原編著『中学校新学習指導要領の展開社会編』明治図書、2008年)

・事例：自治会費の徴収

①金銭，②なし，③結果

・事例：マンションのエレベーターの修理費用負担

①金銭，②なし，③結果

B. 藤瀬泰司「自転車の歩道通行の是非」(朝倉・伊藤・橋本編著『平成20年告示新学習指導要領中学校社会をよりよく理解する。』日本文教出版、2008年)

①なし，②車道，③機会

C. 小谷恵津子「学級園のルール」(岩田・米田編著『中学校社会「新教材」授業設計プラン 新旧比較で授業はこう変わる』明治図書、2009年)

①学級園の運営の負担軽減，②なし，③結果

D. 桑原敏典「クラスマッチの練習場問題」(桑原『中学校新教育課程社会科の指導計画作成と授業づくり』明治図書、2009年)

①勝ちたいという欲求，②練習場，③機会

E. 大杉昭英「島のフェリー運航」大杉昭英「社会認識体制の成長をめざす社会科・公民科授業」『社会科研究』第60号、2004年)

①生活の利便性，②財政，③結果

F. 小栗英樹「教室の共用スペース利用」(小原・峯 著『「思考力・判断力・表現力」をつける中学公民授業モデル』明治図書、2011年)

①利便性，②教室の共用スペース，③結果

このように先に示した三観点からみると、日常的な事象としてはFの事例が、社会的な事象としてはEの事例が分かり易い。これは、配分を巡って対立しているものが何かということが明確であることと、それによって満たされる欲求が単純明快であることによると思われる。

V. 「対立と合意，効率と公正」を捉えさせる授業構成の手順

本研究においては「対立と合意，効率と公正」の「習得」を目指す授業の開発を目指している。その際には、以下の二点を前提としたい。

・概念的枠組みは使うことによって習得するということをも前提とし、生徒の主体的な思考や判断を保障する授業とすること。

・生徒は、日常生活を通して上記のような概念的枠組みを自分なりに身につけていることを前提とし、それらの成長・発展を促す授業とすること。

授業は、取り上げた事象について対立点を明確にし、合意への見通しを持たせたい。効率と公正の観点から事象を考察していくように構成するため、以下のような展開となる。

①対立点の把握

②効率的な状態の確認

③公正さを実現するための方策の検討

②から③へ移行する段階においては、条件設定を変えることで、様々な条件のもとで公正さをいかに実現していくかを考察させ、公正さについての生徒自身の価値観を見直させたい。開発した単元は、資料1として後に示している。

VI. 高等学校公民科における見方考え方の育成

1. 高等学校における見方考え方育成の特質

V章までのような中学校社会科における見方考え方の育成をふまえて、高等学校公民科においてもそれらを発展させ得るような学習が取り入れられるようになっている。そこで見方考え方として示されている概念は、「幸福，正義，公正」である。

公民科の科目「現代社会」においては、たんなる事象や出来事の暗記に留まらないように、生徒一人ひとりが社会の在り方や、自分自身の生き方やあり方について考察することが目指されていた。しかし、今回の学習指導要領においては、それらを一層徹底するために、現代社会の諸課題をとらえて考察するための基本的な枠組みとして、幸福，正義，公正という三つの概念が具体的に示されることになった。そもそも、高等学校の公民科の授業においては、考えさせたり判断させたりする機会が設定されることは少なく、制度や仕組みの解説とその暗記に重点がおかれる傾向があった。そのような状況を克服するために、現代社会をとらえるための枠組みを明確に示し、それに基づいて思考や判断を促す授業が求められるようになったのである。

これら三つの概念のうち、公正は中学校社会科公民的分野において示されている現代社会をとらえるための見方や考え方としても取り上げられている。その公正に加えて、幸福と正義が「現代社会」では、「社会の在り方を考察する基盤」として示されている。「社会の在り方を考察する基盤」とは、『解説』によれば「現代社会の諸課題をとらえて考察するための基本的な枠組みを構成するもの」とも説明されている。これらは、見方や考え方とは若干異なる意味で用いられている。それは、『解説』の以下のよ

うな文言による。

従前の学習指導要領においては、社会的事象をとらえる概念的な枠組みとして「見方や考え方」の育成を図ることが求められたが、今回の改訂ではさらに現代社会の諸課題をとらえる枠組みを理解させることをねらいとしているのである。

すなわち、「概念的な枠組み」とは、「見方や考え方」よりもさらに根本的で、包括的なものであると考えられるのである。したがって、中学校社会科でも取り上げられている「公正」も、「現代社会」では、意味合いが若干異なることが予想されよう。

また、中学校社会科公民的分野の「見方や考え方」の学習が、公民的分野の冒頭に位置づけられ、政治や経済の学習をする前に取り組むようになってきているのに対して、「社会科の在り方を考察する基盤」の学習は、中学校社会科の学習を一通り終えた高校生が、現代社会の冒頭で学ぶ単元となっている。この点を考慮しても、「見方や考え方」の学習と「社会の在り方を考察する基盤」の学習は異なってくると言えるのではないか。

2. 「幸福、正義、公正」とは何か

学習指導要領の『解説』によれば、幸福、正義、公正の概念は、それぞれ以下のように整理できる。

- 幸福＝自分らしさの追求，自己の目的の実現，人生の充実。
- 正義＝すべての人にとって望ましい解決策，社会にとって正しいこと。
- 公正＝対立や衝突の調整や解決の過程，またはその結果の内容において個人が対等なものとして適切な配慮を受けること。

そのうえで、これらについては「個別に取り上げて理解させるのではなく、現代社会における諸課題をとらえる枠組みとして相互に関連させて扱うことが大切である」と述べられている。すなわち、幸福、正義、公正の三つの概念は、個別にその意味を理解することが目指されているわけではなく、現代社会の諸課題を捉える際にこれらの概念を相互に関連させながら活用していくことが求められているのである。

以上のように、見方や考え方として示された中学校社会科公民的分野の「対立と合意、効率と公正」が、事象を捉える枠組みであったのに対して、社会の在り方を考察する基盤である「幸福、正義、公正」は、実現すべき理想であり、価値であると考えられるのである。

これらの学習を進めるに当たっては、学習指導要領の内容の取扱いにおいて、「生命、情報、環境」などを扱うことが求められている。ただし、飽くまで解決に取り組むことが目的であり、解決自体が必要であるというわけではない。

「生命」を取り上げるに当たっては、科学技術の進展により生命に関する倫理との間にギャップが生じ、それによって様々な課題が生じていることに気付かせることが求められている。事例としては、クローン技術の研究が挙げられており、生命の尊厳を保持しようとする立場と食糧増産を実現しようとする立場との対立を取り上げて課題解決に取り組ませるように説明されている。

「情報」については、様々なメディアの発達と、情報化社会における情報の活用や諸課題を考察させることが求められている。事例としては、生活の安全にかかわり情報の流布について、情報を流布することから生じる個人や組織の利益侵害と、情報を公開しないことによって生じる社会の安全に対する不安や危険性との対立を取り上げるように求められている。これは、例えば、情報を流布することで個人のプライバシーなどが公になり幸福追求が妨げられる一方で、情報を得られないことで、生命や身体を自由を各自が自分で守る準備を整えられないといった問題が生じるということである。

「環境」では環境に関わる政治・経済体制や倫理観について検討を深めることが求められており、地球温暖化、資源・エネルギー問題などの環境に関わる諸問題が例として示されている。具体的には、熱帯林伐採について、経済活動を優先する立場と環境の保全を期待する立場との対立を取り上げ、なぜ地球規模の課題とされながらも国際的な合意が成立しにくいのか、有限な環境と資源をどのように現在世代と将来世代の間で分配するかということを考察させることなどが示されている。

以上のように、生命、情報、環境という三者いずれについても、幸福追求をめぐる二つの立場の対立を想定し、それをいかに解決するかという考察の過程で正義や公正を枠組みとして活用するという展開の授業が求められている。

ここで、疑問となるのは、なぜ、幸福という概念が取り上げられたかということである。先の三つの事例を見ても、幸福という概念が登場する余地はないし、またそれがないと事象を説明できないわけではない。むしろ、わざわざ新たな幸福という概念を用いることは、かえって事象を捉えにくくするだけであろう。幸福はそれだけ単独で取り出すとあまり意味があるようには見えないが、それが正義、

公正という他の二つの概念とセットになって示されることによって初めて意義が明確になってくる。上の三つの事例の中で人々が追求していることは、生命の尊厳や食糧の安定供給、安心や安全や安定、自己の利益や他者の利益など様々である。一見、異なる価値観に基づいて異なる生き方を思考する人々が共存することで対立が生じているかのように見える、しかし、それらは全て幸福の実現という言葉でひとくくりにすることが可能である。そして、この幸福の実現は、人が他者と共に生きていかなければならない以上は、全てを同時に満たすことができないものであり、何らかの制約を受けざるを得ない。この制約を受け入れるための条件が正義と公正なのである。我々は、正義や公正をどの程度実現するためであれば、幸福の実現をどの程度まで放棄できるかこの点に課題は全て集約されるのではなからうか。これは、「現代社会」という個々人の生き方と社会の在り方の関係を問う科目ならではの課題設定であるとも言えよう。

このように、「幸福、正義、公正」という三つの概念が課題解決の基盤となる価値・理想として掲げられた「現代社会」は、先に挙げたような社会観に基づいている。その社会観とは、全ての幸福は同時に実現できず、誰かの幸福の実現は、必ず他の誰かの幸福実現の制限を伴うというものである。この考えは、中学校社会科公民的分野の「効率と公正」の見方や考え方にも通じるものであり、ここに中学校社会科と高等学校公民科の連続性・系統性を見出すこともできるのである。

3. 高等学校における見方考え方育成のための授業構成

「幸福、正義、公正」をとらえさせるための授業の構成原理は、下記のような段階をとると考えられる。

- ① 問題の概要の把握
- ② 問題の構造の追究(幸福をめぐる対立の構造)
- ③ 正義の実現による問題解決方法の追究
- ④ 問題解決のための公正さの追究
- ⑤ 幸福追求の限界の認識

幸福の実現をめぐってどのような対立が見られるかを確認したうえで、正義を実現するための問題解決の方法を考えさせるのが段階の1から3である。そして、次の段階で、採用した問題解決の方法によって公正さが実現し得るかを検討する。最後に、幸福追求のため自分たちが放棄しなければならない、あるいは制約を受けるということを振り返る単元は終結する。

以上のような展開を、安全な社会の実現と性犯罪者のプライバシーを教材として取り上げて構成した

単元が、資料2で示したものである。

Ⅶ. おわりに

以上のように、新しい学習指導要領のもとでは見方考え方が明確に示されることによって、従来よりも、思考力や判断力の育成に重点をおいた学習指導が求められるようになったと考えられる。

しかしながら、開発単元を見ても分かるように、設定された見方考え方という思考の枠組自体については、吟味されることなく修得させることが目指されている。このため、それらが絶対視され、その捉え方のみが正しいものとして子どもに押し付けられるような学習になることが懸念されよう。あくまでこれらの概念は一つの例にすぎないのであって、社会的な事象を捉える枠組みは多様に想定することができるはずである。学習指導要領に示されたこれらの枠組み対抗する独自のものを、現場から考案していくことが今後必要ではなからうか。

【参考文献】

- ①小塩隆士『効率と公平を問う』日本評論社、2012年。
- ②小原友行・峯明秀『「思考力・判断力・表現力」をつける中学校公民授業モデル』明治図書、2011年。
- ③大杉昭英編著『高等学校新学習指導要領の展開公民科編』明治図書、2010年。
- ④文部科学省『高等学校学習指導要領解説公民編』2010年。
- ⑤社会系教科教育学会編『社会系教科教育研究のアプローチ～授業実践のフロムとフォー～』学事出版、2010年。
- ⑥桑原敏典『中学校新教育課程社会科の指導計画作成と授業づくり』明治図書、2009年。
- ⑦岩田一彦・米田豊編著『中学校社会「新教材」授業設計プラン新旧比較で授業はこう変わる』明治図書、2009年。
- ⑧文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版、2008年。
- ⑨朝倉啓爾・伊藤純郎・橋本康弘編著『平成20年告示新学習指導要領中学社会をよりよく理解する。』日本文教出版、2008年。
- ⑩堀内一男・伊藤純郎・篠原総一編著『中学校新学習指導要領の展開社会編平成20年版』明治図書、2008年。
- ⑪松井茂記『性犯罪者から子どもを守る　メーガン法の可能性』中公新書、2007年。
- ⑫大杉昭英「社会認識体制の成長をめざす社会科・公民科授業」全国社会科教育学会『社会科研究』第60号、2004年。

資料1 単元「きれいな街路は誰が？」
—効率と公正を習得させるプラン—

1. 科 目 中学校社会科公民的分野「現代社会をとらえる見方や考え方」（2時間）

2. 目 標

- (1) 日常生活の中で見られる対立や紛争について、効率と公正の観点から考察し、より良い解決策を判断することができる。
- (2) どのような配分にすれば、社会全体にとって最も無駄がなく効率的になるかという効率と、誰もが納得できる方法で決めるためにはどうすればよいかという公正の観点を認識することができる。

3. 学習の展開

第1時 「どうすれば、きれいな街路を保つことができるか」

過程	教師の指示・発問	学 習 内 容
導入	<p>○日常生活や学校生活の中で他者と意見が対立した経験を振り返らせる。</p> <p>○なぜ、けんかやトラブルは起きるのだろうか。</p> <p>○けんかやトラブルを解決するためには、何が必要か。</p>	<p>○日々の生活の中で、友達や家族とのけんかやトラブルは絶えず生じている。</p> <p>○人によって物事に対する考え方が異なったり、立場によって利害が対立したりするから。</p> <p>○話し合い、仲裁。</p>
展開	<p>○次の資料を読み、どのような対立が生じているか、その原因は何かを読み取ろう。</p> <p>○対立を解消し問題を解決するためには、どうすべきだろうか。</p> <p>○ルールを決定するにはどのような方法があるだろうか。</p> <p>○多数決で決める際には、どのような点に注意すべきだろうか。</p> <p>○皆がマンションの住民になったつもりで、この問題を解決するためのルールを決定しよう。ただし、清掃の内容は、落ち葉やゴミを除くことと、樹木への水やりである。</p> <p>○次のような意見が住民から出たとしたら、どのように対応しますか。これらの意見のうち、受け入れられないものはどれか。それはなぜだろう。</p> <p>①週一回ではなく、毎日順番にしてはどうか。</p> <p>②週一回、全員ではどうか。</p> <p>③やりたくないの、ルールには従いたくない。</p>	<p>○あるマンションの前の街路の汚れが目立ち、樹木が枯れたりして見た目も悪くなったので住民から苦情が出るようになった。誰かが街路の清掃をしなければ、問題が解決しない事態となっている。週一回程度の清掃が必要だが、住民の誰もが清掃をやりたがらず対立が生じている。</p> <p>○住民が話し合って清掃についてのルールを決定する必要がある。</p> <p>○多数決。</p> <p>○少数意見の尊重など。</p> <p>○週一回順番に清掃をする。</p> <p>○①や②はやり過ぎである。実行することに伴う負担に對して、得られる満足が見合わない。③は、誰かがやらないと、他の人の負担が増えるので受け入れられない。④は、かかる費用の程度によって受け入れられるかどうかが決まる。かかる費用があまりに高いようだと受け入れられない</p>

	<p>④皆でお金を出し合って、週に一回雇った業者に清掃をしてもらおう。</p> <p>○週一回順番に清掃というルールが、先の①から④に比べて優れているのはなぜか。</p> <p>○何かの負担を分け合うルールを作る際の、ルールの妥当性を図る基準を決めよう。</p>	<p>○無駄が無いうえに、住民にとって負担が公平だから。</p> <p>○無駄なく効率的か、全ての関係者にとって公正か。</p>
終結	<p>○この事例と同様のルールを適用できる事象が他にないか考えてみよう。そのうえで、問題を解決するルールを考えてみよう。</p>	<p>○自治会役員の当番、資源ごみの収集当番など。</p>

第2時 「よりよいルールをどのように作るか」

過程	教師の指示・発問	学習内容
導入	<p>○週一回順番に清掃するというルールは、いつでも、どこでも、どのような条件のもとでも正しいものだろうか。例えば、高齢で体が不自由な住民も、他の住民と同様に負担をすべきだろうか。</p> <p>○効率的なルールが常に正しいとは限らないようである。このようなケースはほかにどのような状況が考えられるだろうか。</p>	<p>○高齢者の負担は軽くしてもよい。</p> <p>○単身赴任者、留守がちの人など。</p>
展開	<p>○次のような人の訴えに対して、ルールを変えるべきだろうか。変えたとしたらどのようなルールが考えられるだろうか。</p> <p>ア) 出張が多く順番になってもできないことが多いうえ、昼間はマンションにいないため、街路を汚すこともない。</p> <p>イ) 単身のため家族の世帯に比べると一人の負担が大きい。</p> <p>ウ) 自宅兼事務所としてマンションを利用してため多くの来客があり、その来客が捨てる吸い殻などで街路が汚れることが多く、他の世帯よりも街路の汚染に対する責任が大きい。</p>	<p>○社会全体で効率的であっても、個々の事情により、負担と結果として受ける満足のバランスが悪い場合は配慮が必要な場合がある。</p> <p>○同じマンションの住民であり、世帯単位で負担を考えるならば特別な配慮は必要ないが、本人の満足の度合いを考慮し、金銭面の負担などに置き換えることも考えられる。</p> <p>また、原因に対する責任の度合いによって負担を大きくするルールも考えられる。</p>
終結	<p>○効率性を追求するだけでは誰にとっても良いルールは作ることはできない。構成員の誰にとっても良いルールとはどのようなものだろうか。</p>	<p>○公正さを保障するルールが必要である。</p>

資料2 単元「性犯罪の防止とプライバシー」
—幸福、正義、公正を習得させる授業プラン—

1. 科目 高等学校公民科現代社会「情報に関わる諸課題」（2時間）

2. 目標

- (1) 現代社会の諸課題について、幸福、正義、公正などの観点から多面的、多角的に考察し、様々な立場や考え方をふまえて公正に判断できる。
- (2) 現代社会の諸課題を考察する基盤としての幸福、正義、公正といった枠組みについて理解する。

3. 学習の展開

過程	学習項目	主な学習活動	指導上の留意点(資料)
導入	○情報技術が発達した監視社会の様子	○監視社会の概要の把握 □教師の発問「近年は、各所に設置された監視カメラが犯罪の予防や、事件の解決、犯人の逮捕に大いに役立っている。いつ、誰が、どこで何をしているかを監視している社会は、安全で暮らしやすい社会だろうか。」「例えば、仮に個人の活動が全て監視される社会になったとしたら、どのような問題が生じるだろうか。」 ■各自が自分の意見を発表する。 ○監視カメラが各所に配置されているような監視社会は治安維持には都合がいい反面、個人の行動が常に誰かによって把握されていることになり、プライバシーの保護という面で問題があることに気付かせる。	・監視カメラが事件解決に役立った新聞記事など。
展開1	○性犯罪者に関する情報公開が行われているアメリカ合衆国の実態からみる社会全体の幸福の追求	○アメリカにおける性犯罪者の情報公開の実態の把握 □教師の発問「アメリカでは、性犯罪者の情報が公開されており、市民はその情報を得て自らの生活の安全を守っている。なぜ、何のためにこのような制度が成立したのか。」 ■各自が、記事から分かる事実についてワークシートにまとめる。 □教師の説明「アメリカでは性犯罪の多発と性犯罪者の再犯率の高さが問題となっており、子どもを性犯罪から守り、もし犯罪が起きた場合に捜査を容易にするために性犯罪者の情報が公開されている。」 ○性犯罪者の情報公開をめぐる論争点の整理 □教師の発問「この制度によって、誰の、どのような権利が制限されているか。そのように制限することは妥当だろうか。」する。 ○制度化に向けてどのような手続きが必要かを確認する。 □教師の説明「制度が成立することによってもたらされる社会全体の利益を考えるとともに、制度による個人の権利の制約がどれくらいか、それは許容されるものかどうかについて考慮する必要がある。」	

<p>展開 2</p>	<p>○性犯罪者に関する情報公開による犯罪の抑止と犯罪者のプライバシーの保護の関係をふまえた公正の実現</p>	<p>○性犯罪者の情報公開が許される基準の確認</p> <p>●教師の発問「罪を犯した人の権利は、何でも、いつでも制限されて仕方がないのだろうか。次のような条件に関して、制度のあり方を考えてみよう。</p> <p>①どのような犯罪者であれば、情報の公開を認められるか。犯した罪の種類と、再犯数は。 ②情報を公開する場合、どのような情報であれば公開を認めるか。 ③どのような範囲の人々に、どのような方法で公開するか。」</p> <p>■グループで相談しながら課題に取り組む。グループの意見をまとめて発表し話し合う。</p>	<p>・情報を公開することによって得られる社会全体の利益と、それによって制約される個人の権利の関係について考えさせる。</p>
<p>展開 3</p>	<p>○性犯罪者に関する情報公開制度の導入とその要件としての正義の実現</p>	<p>○性犯罪者の情報公開の制度化の要件の確認</p> <p>□教師の指示・発問「日本でもアメリカ合衆国と同様の制度を導入するかどうかの問題となった時、あなたは、どのような条件のもとでなら賛成しますか。それとも、どのような条件のもとであっても反対しますか。」</p> <p>■各自が自分の意見をまとめ、グループごとに話し合う。グループで話し合った結果をクラスで発表</p> <p>■各自が自分の意見をワークシートにまとめ、グループで話し合いグループごとに意見を取りまとめて発表する。</p> <p>□教師の説明「アメリカでは性犯罪者の再犯率の高さや、性犯罪から子どもを守る必要性から性犯罪者の情報公開が指示される一方で、矯正教育による更生の可能性や、情報公開によって性犯罪者が受ける攻撃の面から反対する意見もある。」</p>	<p>・制度化が必要とされる社会的条件、制度自体の内容の両面から考察するように促す。</p> <p>・アメリカにおける性犯罪者の情報公開に関する新聞記事と、そのような情報を公開しているサイトの一部を示す。</p>
<p>終 結</p>	<p>○正義や公正をふまえた幸福の実現の困難性</p>	<p>○犯罪者の権利と安全な社会の確保の関係の確認</p> <p>□教師の発問「罪を犯した人も一人の国民として基本的な人権を持っているとすれば、安全な社会の確保のためにその人の権利が容易に制限されることがあってはならない。法の下での平等や幸福追求権などは国民に認められている権利であるが、このような観点から考えて性犯罪者に関する情報公開についてどのような問題があるか考えてみよう。」</p>	

《参考文献》

- ・松井茂記『性犯罪者から子どもを守る　メーガン法の可能性』中公新書、2007年。
- ・橋本康弘「法関連に関する授業開発—現代社会『性犯罪者のプライバシーを考える』—」社会系教科教育学会編『社会系教科教育研究のアプローチ～授業実践のフロムとフォー～』学事出版、2010年、pp.257-264。